

第25回熊本大学附属図書館貴重資料展

解説目録

源氏物語 千年の時

期間 平成20年10月30日(木)～11月1日(土)

会場 熊本大学附属図書館自由閲覧室

入場無料

公開講演会

源氏物語と住吉の姫君

講師 森 正人 大学院社会文化科学研究科教授

永青文庫の源氏物語

講師 徳岡 涼 教養教育実施機構講師(非常勤)

日時 平成20年11月1日(土)午後1時～3時

会場 放送大学熊本学習センター講義室

受講無料



『紫式部日記』の寛弘五(一〇〇八)年のできごとを記したなかに、その名があらわれてよりちよつど千年に当たる今年、源氏物語をテーマとして、熊本大学附属図書館寄託永青文庫蔵の資料に、文学部日本語日本文学研究室等の蔵書を加えて貴重資料展を開催します。

源氏物語は、一条天皇の宮廷社会に生まれた仮名文学の代表作です。その比類のない達成は、二〇〇年後の評論書『無名草子』に「仏に申し請ひたりける験にや(仏に祈願した霊験ではないか)」と絶賛されるほどです。源氏物語のど「がどのよう」にすぐれているのか、なぜこのよな文学がその時代に作られたのかという問いかけは、以来現代まで続けられてきました。本貴重資料展もこうした問題意識に沿うものとなっています。

永青文庫には源氏物語写本・版本が多数おさめられています。このことは、源氏物語が芸の中核的な存在であったことを物語るものです。そのなかから細川幽齋筆本、新出の松花堂昭乗筆・土佐光起画表紙本など注目すべきものを選んで展示しました。

源氏物語の卓越した文学性は、紫式部の資質と前代文学との出会いによるところが大きいといえます。物語文学と女性による仮名日記の伝統を継承し、白居易(号は楽天)の詩をはじめとする中国文学からも摂取し、これらを踏まえ変容させて、新しい作品世界を創り上げました。そこで、本展示では、源氏物語に到る物語文学の展開と、源氏物語の大きな影響のもとでなお独自の作品を生み出そうとした動きをおまかにたどることができるように配列しました。

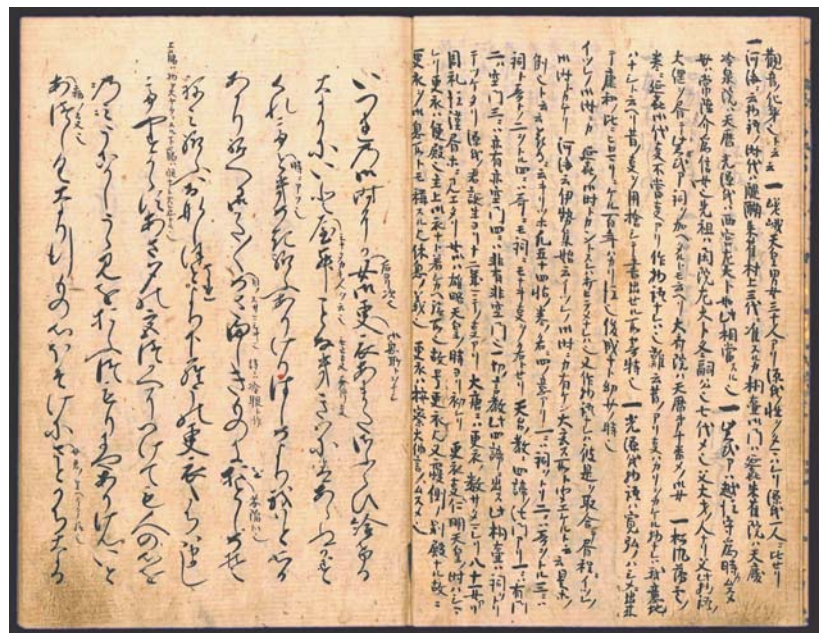
平安時代末になると、歌道と結びついて、源氏物語は古典としての地位を得てゆきます。数々の注釈書がまとめられ、系図や年立(作品世界の年表)が作成され、源氏物語が学問の対象となって、それは江戸時代を経て現代に及んでいます。同時に長大で難解な作品を初学者にも理解させるために、『源氏小鏡』などの梗概書が作られました。これらは、源氏物語の世界を踏まえて和歌を詠んだり連歌を作ったりするための手引きでもありました。展示の後半はこうした源氏物語享受の諸相を概観するものとなっています。

*本目録は、展示資料名、装丁、写本・刊本の別、冊数、永青文庫の登録番号または永青文庫蔵以外の場合の所蔵者名を示し、簡単な解説を加えたものです。

1. 源氏物語 列帖装写本五四帖 戌十

源氏物語は、室町末期以降、藤原定家の書写した青表紙本が再評価され、今日に至るまで一般的に用いられている。当本は、その青表紙本系統に属する。附属の証書により、細川幽齋(一五三四〜一六一〇)の書写(「若菜下」のみ山崎宗鑑筆)とされる。本文は『小学館日本古典文学全集』(新編も)の校合の一本ともされた。行間には細字の書き入れがある。幽齋はこれまでに著された古注釈の集成を試みようとしていたが、自身では果たすことなく、中院通勝がその志を継ぐ。しかし、幽齋は自身の勉強のために、本文を写し、源氏物語の注を書き入れたものとみられる。『花鳥余情』『紫明抄』『弄花抄』からの書き入れが見られるが、中に「聞書」と、注の末尾に記す書き入れがある。これは、三条西公条の講釈を書き入れたものと推される。

なお繰り返し用いたため「垢付本」とも称される。表紙は打曇りに金泥にて草花林泉文様を描き、白紅梅蒔絵筆筒に収められる。筆筒、装丁共に後代のもの。県指定重要文化財。



2. 源氏物語 袋綴写本五四冊 丑上・一

永青文庫には室町期写の二組の寄合書(巻毎に異なる人物が書写したもの)が蔵される。当本は中院通勝筆による「源氏物語筆者目録」が備わる。主たる筆者は、「桐壺」近衛前久、「帚木」中院通勝、「花宴」細川忠興、「朝顔」本阿弥光悦、「玉鬘」細川幽斎、「椎本」里村紹巴。「夕顔」は千代女筆とされ、細川忠隆室前田利家娘と推される。四段組茶漆塗箱あり。

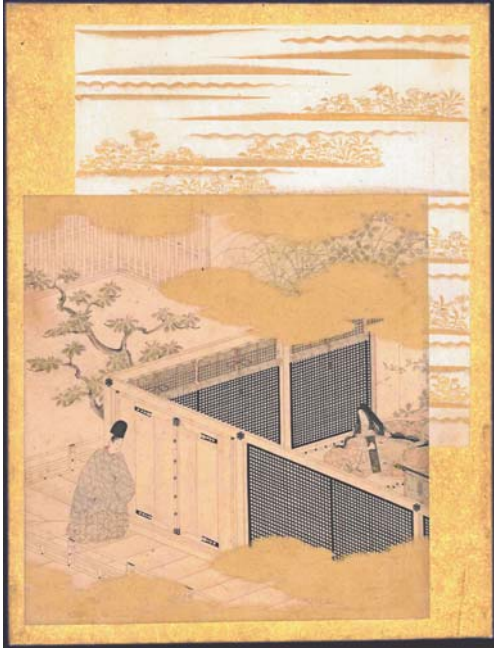
3. 源氏物語 袋綴写本五四冊 丑上・三

二組目の寄合書である。「桐壺」青蓮院殿尊朝親王、「帚木」細川幽斎、「空蟬」飛鳥井雅庸、「末摘花」「花宴」里村紹巴、「花散里」「野分」「御法」「蜻蛉」今出川晴季、「初音」「藤裏葉」心前、「少女」里村昌叱。五段組黒漆塗篋筒あり。

4. 源氏物語 列帖装写本五四帖 第参号

表紙に源氏絵をあ

しらつた五十四帖揃いの源氏物語。源氏絵は土佐光起(一六一七〜一六九一)筆、本文は、松花堂昭乘(二五八四〜一六三九)筆との添え状がある。繊細で古雅な源氏絵と、寛永の三筆である松花堂の筆の運びが味わい深い一書。



絵の場面選択は、典型を外れる独特な基準で描かれる箇所が多く、例えば、「紅葉賀」巻は、通常、源氏と頭中将との青海波の舞いの場面が選ばれるが、当本では、琵琶を弾く源典侍と源氏との邂逅を描く。なお、本文には、『河海抄』『花鳥余情』『細流抄』『弄花抄』『萬水一露』『紹巴抄』などの源氏注釈書から細字で書き入れがされている。

5. 源氏物語 列帖装写本五四帖 赤二〇四・三七

北村季吟(一六二四〜一七〇五)筆。季吟は源氏物語の注

釈書『湖月抄』を著す。当本は、元禄七年(一六九四)、七一歳の折りに書写したものの。奥書に、江城向南亭における書写と記される。季吟と実子湖春は、元禄二年(一六八九)に幕府に召し抱えられ、翌三年、神田鷹匠町(小川町)に邸を賜り、近水亭、向南亭と称した。従つて、その向南邸で書写したものである。公家様を意識したのか枅形に仕立てられる。なお、最終「夢浮橋」の帖は、一行毎に、金、銀、朱(二種)、藍、墨、緑の七色を使い分けて交ぜ書きされる。



6. 長恨歌琵琶行 袋綴写本一冊 一〇七・三六六

唐の詩人・白居易(号は楽天)の「長恨歌」と「琵琶行」。白居易の詩は平安時代に広く愛好され、漢詩はもとより和歌の発想や表現に深い影響を与えた。源氏物

語にも多数の引用が見られ、とりわけ「桐壺」巻における天皇の桐壺更衣に対する愛情の物語は、玄宗皇帝と楊貴妃をモデルとした「長恨歌」の展開・表現に基づく。当本は清原枝賢(道白)の訓点を細川藤孝(幽斎)が写したとの奥書があり、片仮名の訓と注が書き込まれている。

7. 竹取物語 袋綴刊本二冊 二・二・二〇

九世紀初め頃の成立か。源氏物語「絵合」巻に、「物語の出来はじめの親なる竹取の翁」と記され、一条朝には「物語の祖」と認識されていたことがわかる。伝承的な求婚難題説話の形を取りながら、難題克服結婚へは至らない点などが、創作的と見られる。

作者は、漢詩の素養のある中・下官人とされる。当本は天明三年(一七八三)跋を伴う。

8. 伊勢物語 列帖装写本

三帖 赤二二・三二四

むかし男(業平)の一代記の歌物語の絵入本。伊勢物語は源氏物語の時代から絵画化されてきたことは、「絵合」巻において、『竹取物語』に伊勢物語が合わされることからわかる。当本は、慶長一三年(一六〇八)、角倉素庵によって上梓され一世を風靡した嵯



峨本伊勢物語の絵の構図をほぼ引き継ぐものとなっており、近世中期頃の書写かと推される。しかしながら、独自の場面選択の段や、時節を表す草花を典型とは異なる選択で描いたりする所も見いだされる。絵と本文の料紙は厚みが異なっており別々に制作された後に、貼り合わされ綴じられたものであろう。

9. 住吉物語 袋綴刊本一冊 個人蔵

平安時代中期に作られた継子いじめの物語。大斎院選子内親王の周辺で生まれたか。源氏物語「蛩」巻に、夕顔の遺児・玉鬢が我が身の上を住吉の姫君の境遇に重ね合わせて愛読する様が語られる。当時から改作が繰り返され、長く江戸時代まで読み継がれたために、本文の流動が大きい。当本は刊記はないが、寛永九年(一六三三)版と同版後印と見られる。

10. 落窪物語 袋綴刊本二冊 熊本大学文学部日本文学研究室蔵

平安時代中期に作られた継子いじめの物語。『枕草子』に言及されている。継母の迫害の様や性愛もあからさまで、卑俗滑稽な描写が目につく。継子が高貴な夫を得て、その夫が権勢をもつて継母に報復を繰り返す、長い後日譚を具えているのも特徴的。当本は、読本作家にして国学者でもあった上田秋成の校訂本で、寛政十一年(一七九九)刊。

11. うつほ物語 袋綴刊本三〇冊 一〇三・七二一

源順説もあるが、作者未詳。円融朝の天元年間(九七八〜九八三)以降、一条朝初期にかけてのほぼ十年の間に成立したか。「俊蔭」巻に始まる、清原俊蔭―蔭娘―藤原仲忠―いぬ宮と続く秘琴伝授の物語と、「藤原の君」巻に始まる源正頼の娘あて宮への求婚譚から、東宮への入内、さらにあて宮腹の皇子の立太子へと続く二つの物語が、あて宮への求婚者への一人として仲忠を挙げて絡め取ることから一つの物語となっている。

源氏物語の中では、「絵合」巻において『正三位』(散逸物語)に、「うつほの俊蔭」が合わされる。当本は、延宝五年(一六七七)刊。

12. 狭衣物語 袋綴写本四冊 一〇八・五・四

六条斎院宣旨(源頼

国女)作の物語。白河

朝(一〇七二〜八六)

前期の作品か。狭衣大

将と、源氏宮、飛鳥井

姫君、女二宮、一品

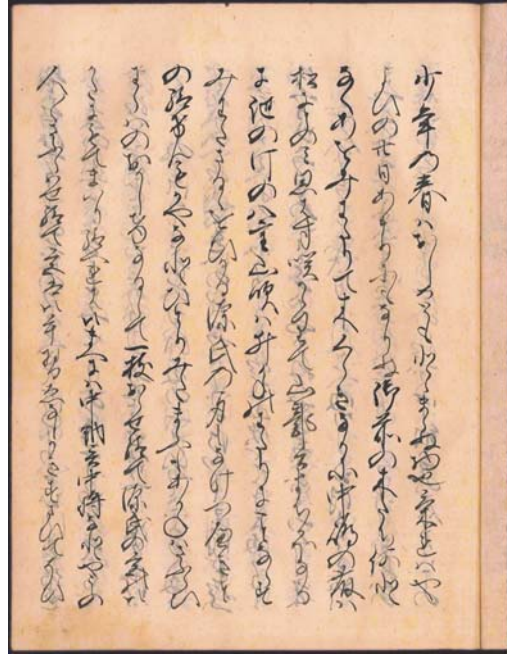
宮、有明の君五人の女

君達の織りなす恋と

宿世の物語。源氏物語

をはじめ先行文学を

余すところ無く撰取



するが、とりわけ冒頭の「少年の春はおしめどもとまらぬ物也ければやよひの廿日あまりにもなりぬ」は、白楽天の詩の「花ヲ踏ンデハ同ジク惜シム少年ノ春」を下敷きにしたもので斬新である。

書写本間の異同が大きいが、おおむね四系列に分かれるとされる。当本は、『新編日本古典文学全集』の分類に従い、巻一を校合すると、第二系統に近いが第一、第三系統の要素も含み伝本系の位置づけは困難である。

13. 栄花物語 袋綴刊本九冊 一〇三・七・三

本邦初の仮名文字による歴史物語。正統二編に分かれたれ、正編は、長元年間(二〇二八〜一〇三七)の赤染衛門による作とも言われるが確証を得ない。続編は、寛治六年(一〇九二)以降間もなくの成立か。天皇親政の時代から撰閣時代の後宮を中心とした歴史を描く。正編は、村上朝(九四六〜九六七)から、道長が没する万寿五年(一〇二八)頃、続編は長元三年(一〇三〇)から寛治六年。「はつはな」巻は、彰子に一条天皇皇子敦成親王の誕生とそれに伴う儀式次第を『紫式部日記』に拠りつつ描く。当本は、無刊記の抄出本である。

14. 紫式部日記傍註 袋綴刊本二冊 個人蔵

紫式部日記は、中宮彰子に仕えた紫式部の手になり、寛弘五年(一〇〇八)秋、土御門邸での彰子の皇子(敦成親王、後の後一条天皇)出産とそれに伴う諸行事の記録等から、寛弘七年の第三皇子・敦良親王の誕生祝いまでが書かれている。なかに消息文体による女房評を含み、源氏物語に関する言及も多い。これに壺井義知が注を加えたもので、享保一四年(一七二九)の序・跋がある。当本は文政四年(一八二二)の刊。

15. 河海抄 袋綴写本十冊 一〇七・三六・九

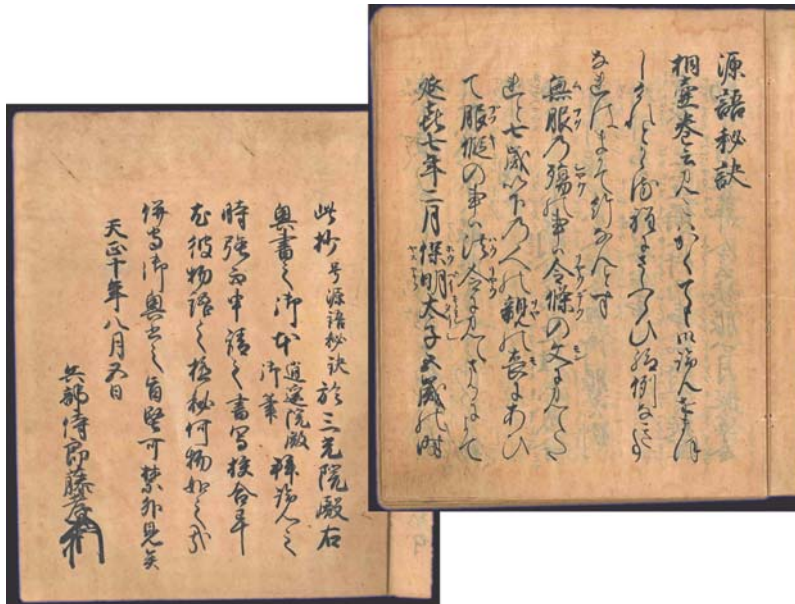
四辻善成(一三二六〜一四〇二)の源氏物語注釈書。伝本は、中書本系と、覆勘本系とに分かれる。当本は、覆勘本系統。覆勘本系は、寛正五年(一四六四)三月に中院通秀が洞院公数本を書写し、その本文を文明四年(一四七二)に三条西実隆が転写したものである。その実隆筆の河海抄を、天正一七年(一五八九)に借り受け幾人かの手で書写した由の幽斎奥書がある。出典考証は徹底を極め、歴史的事実を準拠として掲げるところに特徴がある。

16. 花鳥余情 袋綴写本十冊 一〇七・三六・九

一条兼良(一四〇二〜一四八二)の源氏物語注釈書。文明四年(一四七二)に成立した初度本と、文明八年の再稿本、禁裏に奉上了した文明一〇年の献上本とがある。当本は、初度本に再度本の注の混入が見られる。三条西実条より借り受け、幾人かで書写し、更に天正一七年(一五八九)に幽齋が校合したもの。出典考証よりも文意、文脈を明らかにしようとする点に特色がある。

17. 源語秘訣抄 列帖装写本七帖 一〇一・二二・三九

一条兼良が、『花鳥余情』の別紙秘伝としてまとめた十五条からなる秘説集。文明四年(一四七二)〜五年頃の成立か。当本は、三条西実隆自筆本を天正十年(一五八二)八月五日に細川幽齋が借り出した由の奥書を伴う。中院通勝の書写とする付箋がある。



18. 源氏物語三箇大事切紙 卷子本写本一軸 八・二・甲四三

源氏物語における秘説の伝授は、一条兼良の「源氏物語三ヶ伝授」から始まった。すなわち「揚名の介なる人」「子のこはいくつかまいらすべからん三が一にてもあらんかし」「さぶらひにとのゐもの袋をさへ見えず」の三。当本は、三条西実条が九条植通に伝授した天正二年(一五七四)四月の奥書を持つ書陵部蔵本の写し。この一卷には、「源氏物語口訣之聞書」「狭衣三箇切紙」などを載せ、これらの伝授が実枝↓植通↓幽齋↓松永貞徳↓望月長孝へと伝えられた由の本奥書を伴う。

19. 弄花抄 袋綴写本七冊 一〇七・三六・九

三条西実隆(一四五五〜一五三七)の源氏物語注釈書。文明八年(一四七六)五月に一条兼良や宗祇の講釈を聴聞して、「源氏聞書」としてまとめ、長享三年(一四八九)には宗祇の講釈を再び聴聞し、追記した。更に、肖柏の記した「源氏聞書」も借り受け追記し、永正七年(一五二〇)に手入れをした。「女房装束抄」も附載する。書写年次は不明だが、前掲『河海抄』『花鳥余情』などの書写時期を隔てない時期かと推される。

20. 源氏物語紹巴抄 袋綴刊本八冊 熊本大学文学部日本語日本文学研究室蔵

『源氏二十卷抄』、『源流臨江抄』とも呼ばれる。連歌師里村紹巴(？〜一六〇二)が師昌休の『休聞抄』をもとに称名院三条西公条の講釈を加えて作成されたとされる。当本は、刊記を有しない整版本で江戸時代前期の刊行と見なされる。題簽はすべて剥落し、目録題に「源氏物語抄」とある。ところどころに旧蔵者による書き入れがある。書き入れの内容から中国文学の受容に関心を向けていたことがうかがわれる。

21. 岷江入楚 袋綴写本五四冊 一〇五・一

室町末期最大の源氏物語の古注釈書。細川幽斎の素志を受けた中院通勝の編。通勝自筆本は京大中院文庫に四帖が存するのみ。十余年の歳月を経て、『河海抄』『花鳥余情』に併せ、三条西流の『弄花抄』、公条や実枝の講釈を慶長三年（二五九八）集成する。岷江入楚という書名は、黄庭堅（山谷先生）の「岷江初濫觴入楚乃無底」に拠る幽斎の命名である。

当本は、表紙に細川家の家紋である九曜紋を金・銀泥であしらっており、近世中期の写本とみられる。

22. 湖月抄 袋綴刊本六〇冊 一〇三・一

北村季吟（一六二四〜一七〇四）の源氏物語の注釈書。延宝元年（一六七三）成立、同三年刊行。書名は、紫式部が石山寺に参籠して「須磨」巻から起筆したという中世の伝説による。季吟は、三条西家の学統の箕方如庵と松永貞徳を師とし、これまでの古注を参照しつつ、師匠の説に自説も加えて、湖月抄を執筆した。頭注には諸注を適宜まとめ、傍注には人物の区別、会話主、草子地（語り手の言葉）、文意・語意を添える形を取る。初心者にも利用しやすく近代に至るまで最も流布した。当本は、延宝三年の初版後刷本。

23. 源氏小鏡 袋綴写本一冊 熊本大学文学部日本文学研究室蔵

源氏物語の梗概書（ダイジェスト本）。南北朝に作られ、室町中期に改訂整理がなされたとされ、作者には二条良基（一二二〇〜一三八八）ないしその周辺の人物も想定されている。源氏物語の登場人物について説明し、作中和歌を挙げ、あらずじを記すほか、寄合（連歌）で句を付ける際に用いる縁ある言葉（寄葉）を掲げる。源氏物語を踏まえて和歌や連歌などの文芸を創作するにあたり、簡便な手引き書として用いられたもので、伝来には連歌師がかかわっていたと見られる。当本は題簽に「こかみ」とあり、古本系に属し、天文（一五三二〜一五五）頃の書写とされ

る。また「藤惺」「冷泉府

書」の蔵書印が捺され、

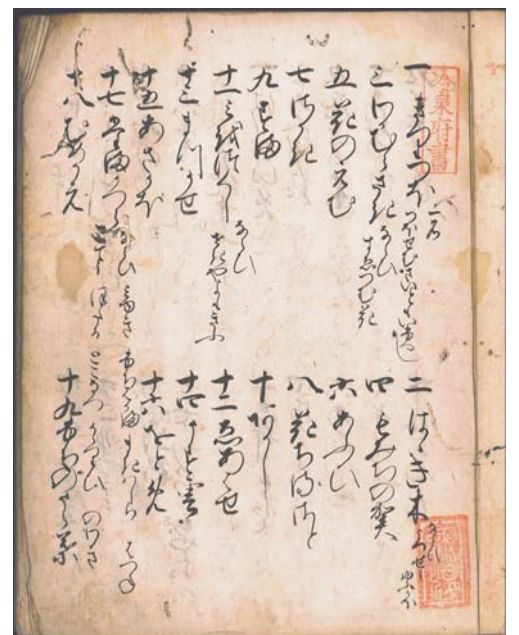
冷泉家の出で江戸時代

初期に活躍した学者・

藤原惺窩および冷泉為

経の旧蔵書と見られ

る。



24. 源氏浅間抄 袋綴写本三冊 八・四・四二―一・二 八・二・八二

源氏物語の梗概書。特に源氏物語に詠まれる和歌を全て載せることに特色がある。『源氏大鏡』『袖かゞみ』『三帖源氏』等とも呼ばれる。稲賀敬二氏の調査（『源氏物語の研究―成立と伝流―笠間書院』）によると、四類に分類され、題を「浅間抄」とするものは第二類に分類される。第三冊目末尾に寛永三年（一六二六）の奥書を伴い、北野松梅院撰と記される。『北野誌』によれば、一条天皇寛弘元年十月北野行幸の時、祭主五世の孫、菅原熙行を社務神社奉行職に補したのが松梅院の始まりで今日に及ぶという。更にその奥書には、松梅院が撰んだ後、息女に伝えられたとも記されているが、これらは信じられていない。稲賀氏によれば、第二類本は享徳二年（一四五三）以前の成立と見られる。

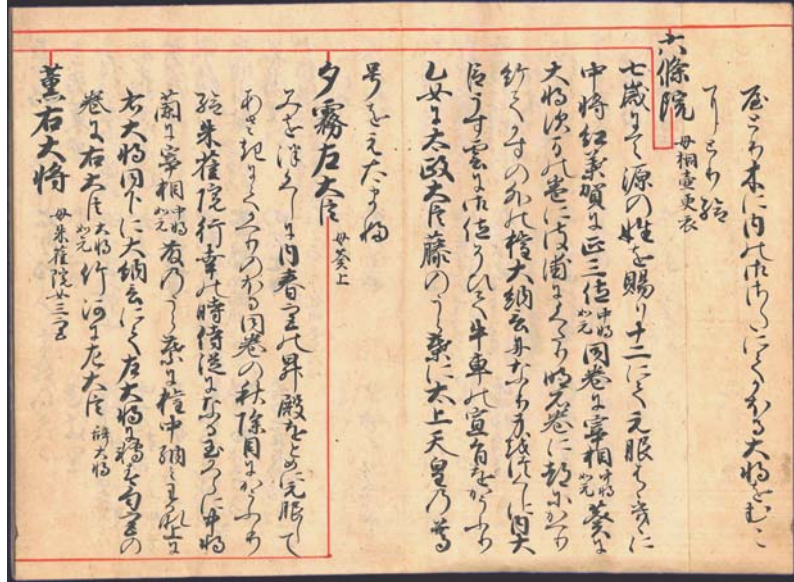
25. 源氏物語年立 袋綴写本一冊 二・三・一四

「年立」とは、「桐壺」巻から「幻」巻までは光源氏の、「匂宮」巻以降は、薫の年齢を立て、その年に起こった事柄を、巻の順序を超えて記したものである。当本は、一条兼良作成の自筆本を吉田兼右（一五一六〜一五七三）が所持していたものを、弘治

三年（一五五七）に書写した由の本奥書を伴う。

26. 源氏物語系図 折本写本一帖 丑上―

源氏物語の系図は、三条西実隆によつて長享二年（二四八八）に作成された新系図と、それ以前の古系図とに分かれる。実隆は幾たびも人々の求めに応じて系図を書写しているが、これは文龜四年（一五〇四）に粟谷親榮のために写したことが、本奥書と『実隆公記』を併せ見て分かる。更にそれを細川幽齋が慶長四年（二五九九）に借り受けて書写したことを示す本奥書を伴う。承応三年版等の源氏物語にもこの系図が付載され、近世期に流布した。



第25回熊本大学附属図書館貴重資料展
解説目録

源氏物語千年の時

森 正人・徳岡 涼共編著

平成20年10月刊

熊本大学附属図書館